

# 大学教育における社会参画体験の取込と実践 ～ボランティアセンターによる教育支援の試み～

鵜殿 博喜

(明治学院大学副学長・経済学部教授)

はじめに

## 特集・学生ボランティア

明治学院大学は、建学の精神であるキリスト教による人格教育を基礎として、広く教養を培い、また深く専門の学芸を教授し、学生の知的能力ならびにその応用能力の涵養を教育の目的とする。この建学の理念に沿い、愛と奉仕の精神をもつ学生を輩出することは本学関係者の一致した願いである。個性ある大学教育にたいする社会的要請が高まる中、学術研究とその教授という従来型の教育形態を超え、教育における「社会参画体験」の重要性に対する深い認識が、学部学科の枠組みを超えて共有されつつある。本取組

は、自らの体験に基づき自主的に思索し行動する力を学生自身から引き出すための、主としてボランティア活動を通じて、本学の教育上の工夫の集成である。

本学は、一九九五年の阪神大震災時の学生組織による救援ボランティア活動を契機として、組織的なボランティア活動支援を開始した。一九九七年にボランティアセンターを設置、翌年ボランティアセンターと改組し、専任スタッフ配置、および活動の予算化を行い現在に至っている。大学の教育目標の柱の一つであると同時に社会貢献活動の一環と位置づけ、本センターの運営委員会委員長を学長が務めるなど、全学的な組織体制でその活動を支援・推進している。

社会参加型の教育では、学生が主体的にその意義を考え、自主的に行動できるよう環境を整えることが肝要である。このため本学では、社会活動に参加しやすい環境を全学的に整える工夫を重ねている。多くの学科では、すでに直接間接に正規の授業にボランティア活動をとり入れた科目を用意している。ボランティアセンターは、独自に、ボランティア活動の紹介、課外活動の支援、学生スタッフの育成、ボランティア公開講座等を鋭意積極的に展開し、学科の教育への協力も行っている。

このような取組によって、学生のボランティア活動に対する理解と意欲は著しく向上し、目標とする「学生自らが様々な形で社会参画の企画・運営を実践すること」が達成されている。



明治学院大学 白金キャンパス礼拝堂

一 取組の内容について

【目的・特色】本取組は、主としてボランティア活動を通じた学生の社会参画体験の支援のため、本学が実施している様々な組織的活動・教育上の工夫の集大成である。大学教育に体験学習を取り入れることは、第一に、学生の自主性を育て、また責任感、判断能力、社会の改良あるいは変革に対する意欲、リーダーシップなど、健全な市民社会の構成員に求められる資質・能力を持つ人材を送り出す上で極めて有効である。

第二に、学生のボランティア活動が直接的に地域社会に貢献するのみならず、学生と社会の接触を通じて大学の知的資源が地域社会に還元されるという副次的な効果も見逃すことができない。近年、社会構造の急激な変動と学生層の大衆化が進む中で、学術研究とその教授に重点を置いた伝統的な教育のみならず、学生の自主的な問題解決能力を涵養し、地域社会との連携を重視する新しい大学教育の方向を模索することが、取組の目的である。

この目標を実現するための核となる組織として、他大学に比して早くから設置されているボランティアセンター

(以下、センターという)を活用し、多面的な支援を行っている。このような組織的支援は本取組の大きな特色であり、地域および企業からも注目されている。大学が企業と連携して行う全国でも初めての試みとなった、学生ボランティアへのファンド提供事業の共催という企画は、本学の教育方針が社会から高く評価されていることの一例であり、従来の枠組みを超えたパイオニア的教育実績であろう。

【実施状況】本取組の活動方針の第一は、学生の自主性を重んじることである。このため、正規授業および課外活動の画面から、ボランティア活動への理解を深め、また実際の参加機会を拓げる工夫を重ねている。第二は、学内と学外の多様な組織との連携を重視することであり、市民・地域・企業との連携を求めて多彩な活動を続けている。紙幅の制限から取組の全容は説明し尽くせないが、以下にその一部を紹介する。

正規授業については、いくつかの学科で社会参加を柱とする専門科目を設置し、それぞれの教育理念に則ってカリキュラムに取り入れている。社会学部社会福祉学科や国際学部には、設立当初から実習科目が置かれており、ボランティア活動が直接、間接に取り入れられている。法学部政治学科では一九九〇年の新設以来、ボランティア活動も取

り入れた「フィールドワーク」が開講されており、近年その内容が多岐にわたって充実している。社会学部社会学科では、ボランティア体験(実習)と研究を総合させた科目「フィールドワーク論」が二〇〇〇年に開講され、経済学部経済学科でもボランティア活動の体験を単位として認定する初めての科目「社会参加実習」が二〇〇二年に開講された。全学共通科目としても、「総合科目(ボランティアと市民社会)」が一九九七年に開講された。

学生の課外活動を支援するため、センターは、独自に以下の業務を行っている。

①「ボランティア団体の紹介」：センターの主力業務であり、常時二、五〇〇件ほどの要請が多方面から寄せられている。紹介は教育効果・安全性などを十分に吟味して行い、紹介先の活動内容を把握するため、地域の市民活動支援センターと情報交換なども行う。また、ボランティア保険をかけるよう指導するなど、安全面の配慮も行っている。

②「学生団体等の支援」：ボランティア系サークルを対象に、メンバー募集や学外活動施設の紹介等を実施している。ボランティア活動に対する啓蒙活動の一環として、学生サークルや地域施設、市民ボランティア団体に関する合

同説明会も開催している。

③「学生スタッフの育成」…毎年度のボランティア活動推進委員会に学生代表が構成員として加わり、教員及び地域代表委員とともに運営に携わっている。センターの年間活動の企画、ニュース・レター発行などの広報活動、地域学校での講師等を担っている。

④「ボランティア公開講座(ノートテイク・ボランティア養成講座)」の開催…聴覚障害学生が講義を受ける際の情報保障とそのサポートを狙いとする要約筆記の知識や技術を取得するための講座企画である。学生には、障害、コミュニケーション、情報保障についての理解を深める機会となり、また、学習権の保障やノーマライゼーションの実現について、大学がいかなる取組をなすべきか、体験を通して考察できる。講座は一般にも公開、学生と地域参加者との交流と情報交換の場にもなっている。

⑤「その他」…アンケートの実施、講習会や講演会の開催、地域との交流イベントや国際交流等の企画運営を行い、二〇〇三年度は本学において全国規模の関連学会も学生の支援を得て開催された。

学内と学外の多様な組織との連携についても、様々な試みがなされている。毎年開催される大学祭「戸塚まつり」



戸塚まつり

は、地域社会と連携した企画が学生により行われており、ボランティア国際年記念シンポジウム、市民活動講座、本学と地元小学校の防災グッズ展示、車いす体験、手話・点字・疑似老人体験といった多彩なプログラムが実施されている。

また、キャンパス内でごく自然に学生たちがボランティアに参加したり、障害をもつ人たちと触れ合う交流活動も盛んに行われている。知的障害者のための近隣地域作業所「DEM」をキャンパスに受け入れ、障害者によるパンの販売を学生が補助したり、重度知的障害者地域作業所「港南ズート」の自閉症の人たちが大学と契約を結び、就労実習を行っている。更に、障害者の就労を支援する専門家「ジョブコーチ」補助のボランティアに参加することも可能である。

## 二 組織的対応について

明治学院大学の設置目的は、「基督教による人格教育を基礎として広く教養を培うとともに深く専門の学芸を教授研究し知的及び応用能力を発揮させる事を目的とし、学問の自由を愛し、人格の尊厳を重んじ自主的精神を養い、以って世界文化の創造と人類福祉の増進に寄与せんとするもの」である。一九九七年の創立一二〇周年記念事業の一環として採択された「一二〇年宣言」でも、基本理念を①キリスト教精神、②リベラリズムの伝統、③国際主義・グローバルリズムの実践と宣言している。

ボランティア活動などの社会貢献は、本学の建学の精神から見て活発に行われてきている。本学院の創始者の一人であるヘボン博士は、明治期に入る前から横浜の地で、医師として施療院を開設し人々の医療活動を行っている。本学院の卒業生である賀川豊彦は、関東大震災時に神戸から駆けつけ、被災者救援を行うなど、わが国のボランティア運動の草分け的な存在である。記録に残る本学学生による自主的活動としては、一九二九年に開始されたセツルメント活動がその嚆矢である。最近では、東南アジア、特にベ

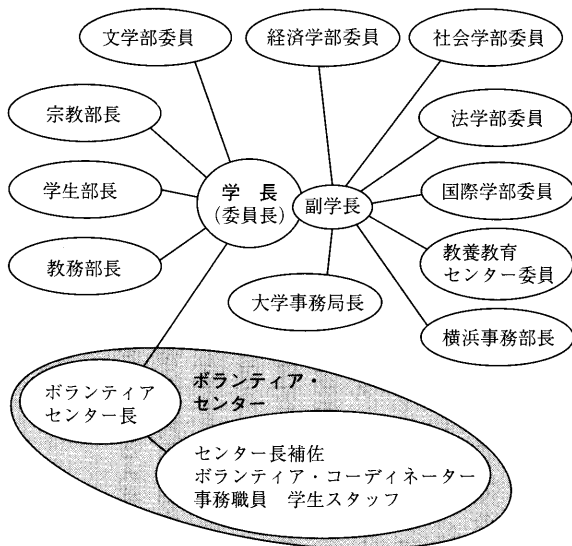
トナムやミャンマーの教育環境の改善と文化交流を目的としたNGO組織「ジュンコアソシエーション」が一九九五年に設立され、現地での小学校建設などに取り組んでおり、また、阪神淡路大震災時のボランティア活動等、学生による自発的な運動の盛り上がりがあった。

本学では、この運動に学部を超えて継続的に参加した学生たちの要望に応え、「総合科目(ボランティアと市民社会)」という科目を開講した。また、学生たちから活動拠点としての組織の設置が要望され、これを承けて「明治学院ボランティアセンター室」が上述の一二〇周年記念事業の一環として一九九八年五月学校法人内に設置され、事務室の確保、スタッフの配置、活動の予算化が図られた。同室は一九九九年一月「明治学院大学ボランティアセンター」と改組され、現在に至っている。

現在、ボランティアセンター(以下、センターという)は白金・横浜両キャンパスにそれぞれ事務室を置き、専任のコーディネーターが各一人所属し運営を担っている(図)。センターでは、学生の自主性を高めるため、学生スタッフが毎年度のボランティア活動推進委員会に構成員として加わり、教員および地域代表委員とともに運営に携わっている。学生スタッフはセンターの年間活動の企画、二

ユーズ・レター発行、ホームページ運営、地域学校での講師担当、地域ボランティアの活動支援等を担っている。センターは「明治学院大学ボランティアセンター規程」に則り、運営されている。その中でセンター業務の重要事項を議するため、運営委員会の設置が謳われており、学長

図 ボランティア・センター運営委員会構成図



が委員長となる他、副学長、各学部選出教員、各部署局長、ボランティア活動推進委員（ボランティア活動に識見を有する専任教職員、学生およびボランティア活動についての学外の有識者・実務家から委嘱）等で構成されている。このように、全学的な組織体制でその活動を支援・推進している。

主なスタッフとしては、専任教員の中から運営委員会の推薦により学長が任命するセンター長、ボランティア活動に経験と識見を有する者の中から委員会の議を経て採用するボランティア・コーディネーターおよび事務職員が置かれている。更に、特筆すべきは学生スタッフの存在であり、センターの業務の遂行にあたって、学生の参加と協力を求めることが可能である。

三 取組の実績について

正規の授業をはじめ、ボランティアセンター（以下、センターという）による多方面にわたる充実した教育支援プログラムによる効果により、学生のボランティア活動に対する理解と意欲が著しく向上している。

具体的事例として二〇〇二年に経済学部が開講した「社

会参加実習」を取り上げる。本科目では、半期で四〇時間以上のボランティア体験が必須である。抽象的な側面に偏りがちな経済学教育に、体験を通じて問題を自ら設定し解決する能力を養うことを目的とするものである。初年度この体験を終えた学生は、全員が「受講してよかった」というレポートを提出している。感想には、「今までボランティアに興味があったが、参加するきっかけがなかった。授業をきっかけに参加できてよかった」というものが多い。

その他、対象者との接触を通じて「相手の立場に立つて考えることの大切さを知った、ボランティアを体験した自分としては、みんなにも同じ体験をしてもらって視野を広げていってほしいと思う」といった声が聞かれている。科目設置の目的が半ば達成されていると言える。その体験を通して発見された問題を、経済学的視点から分析するように指導することが今後の課題である。

特集・学生ボランティア

学生自らが様々な形で社会参画を企画・運営していることは極めて重要である。代表的な例が、二〇〇二年度に始まり、例年約四〇〇名が参加して大きな成功を収めている「地域学生わくわく交流祭」である。これは体育会の学生が自発的に地域とセンターに呼びかけ、文化団体の学生や地域の隣接自治会からも参加者が加わって開催したも

で、スポーツを通じた地域と学生の交流にとどまらず、災害救助の模擬訓練も同時に行って、地域住民に好意的に受け入れられた催しである。

また、港区教育委員会が二〇〇三年度から募集を開始した小・中学校対象の「スクール・ボランティア」にも本学学生が積極的に参画しており、約一〇名が取り組んでいる。このように、様々な領域で、学生の主体的な社会参画活動が進展しつつあり、これらも本取組の成果である。

更に、特筆すべきは本学と企業との連携による様々な取組である。これは、本学の取組が社会的に広く深く評価された証左であり、社会的にも初めて試みられる企画も含まれ、意義深い成果を上げている。本学独自の特色ある企画は次の通りである。

- ①「ソニーマーケティング学生ボランティアファンド」：ソニーマーケティング（株）とセンターが協働で、二〇〇一年度より、全国の学生を対象にボランティア活動の企画を募り、その中から選ばれた企画について総額五〇〇万円に上る助成金を配分・提供する企画。活動の報告書が毎年開催され、全国の学生が交流する機会を提供している。そこに参加した全国の学生には、それぞれの活動を見直すきっかけを与え、連携の可能性を実感させる機

会ともなっている。大学が企業と連携して行う全国でも初めての試みとなった本企画は、本学のボランティア活動に対する取組姿勢が社会から高く評価されていることの一例であり、従来の枠組みを超えたバイオニア的な教育実績となっている。



社会参加実習の授業風景

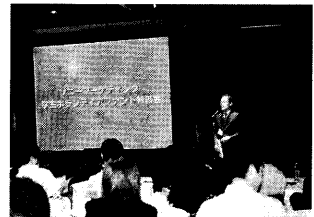
②「シチズンシップ・コラボレーション・カレッジ」・松下電器産業(株)の社会貢献部、有志の本学学生・教職員、他大学やNPOからの参加者による実行委員会形式で、二〇〇二年度より開催されているボランティア活動に関するセミナー。学生が社会人との交流の機会を通して、人間的成長をもたらすという機会になっている。

③「Jスカイスポーツ・障害者向けスポーツ観戦プログラム」・Jスカイスポーツ(株)がセンターに協力を依頼し、二〇〇三年度から開始された社会貢献プログラム。地域のサッカー・クラブ「横浜FC」の試合観戦に「不登校・ひきこもり」の子どもたちを招待し、その克服の手助けを試みる企画であり、その立案から本学学生有志が

加わり、アフター・フォローの役割まで担っている。招待した子どもたちや施設保護者、またサッカー・チームからの感謝状等も届き、新たなボランティア活動の可能性をとらえることができた。

以上のような企画への取組は、それが更に予想もなかった連携を生み出すという結果ももたらし、参加する学生たちに大きな喜びをもたらしている。

加えて、二〇〇二年、センターの「学生スタッフ」第一期卒業生たちが中心となって「明治学院OB・OGボランティアネットワーク」が発足した。様々なボランティア活動を通して培った社会貢献の精神を各々が更に高めていくこと、卒業後もセンターの協力を求めつつ、市民社会の中でボランティアネットワークの構築をしていくことを目指し、活動を展開している。大学に対して、生涯学習の拠点としての役割も大いに期待されている社会的趨勢の中で、このような目的をもった組織の起ち上げは、本取組の大きな成果と言えるよう。



ソニーマーケティング学生ボランティアファンド報告会